

顕彰状

三浦哲郎氏は1931年3月16日、青森県八戸市に生まれた。兄2人、姉3人の末弟だが、幼少期に3人の兄姉に不幸が続き、それが作家としての氏の原体験となった。1949年4月、早稲田大学政治経済学部経済学科に入学したが、翌年春、事情により休学して帰郷、2年間中学校の助教諭をする。氏はその間、一族の血の問題で悩むが、それに正面から向きあうことで、生への道をさぐるべく文学の道を志し、1953年4月22歳で早稲田大学第一文学部文学科仏文学専修に再入学した。1954年には級友との同人誌「非情」にのせた『誕生記』（のち『幻燈画集』と改題）で、英語の教師であった作家小沼丹氏に見出され、その縁で大先輩にあたる井伏鱒二氏の知遇を得て永く師事することになった。

1955年『十五歳の周囲』では、新潮同人雑誌賞を受け、1961年『忍ぶ川』によって芥川賞を受賞して、文壇的地位を確立した。『忍ぶ川』は、不幸な生い立ちの男女が、ひたむきな愛によって再生していく姿を清冽な文体で描いた人間への讃歌であり、戦後屈指の恋愛小説である。

その後の氏は、私小説の良質の部分を引きつぎながらも、長編『海の道』（1970年）、書き下ろし長編童話『ユタとふしぎな仲間たち』（1971年）、歴史小説『おろおろ草紙』（1982年）、『少年讃歌』（1982年）、『夜の哀しみ』（1993年）など精力的な執筆活動を続けている。6年余の歳月をかけて完成した天正の少年遣欧使節の旅の物語『少年讃歌』では、日本文学大賞を受賞し、さらに1985年には不幸な一族の運命を渾身をこめて追求した『白夜を旅する人々』に対して大佛次郎賞が与えられた。

三浦氏はまた日本の短編小説の伝統をうけつぎ守ることを念願としている。つとに短編集『笹舟日記』（1973年）、『野』（1974年）などで高い評価を得ていたが、連作短編集『拳銃と十五の短篇』（1976年）では、野間文芸賞を受けた。近年では百編を擁する短編集をめざして『短篇集モザイク』の試みを続けており、そのみがきぬかれた言葉と完成度の高い構成によって『じねんじょ』（1989年、『みちづれ』所収）、『みのむし』（1994年、『ふなうた』所収）にはそれぞれ川端康成文学賞が与えられ、『短篇モザイクⅠ・みちづれ』は伊藤整賞を受けるなど短編の名手としても定評がある。なお、1987年9月からは『三浦哲郎自選全集』全13巻をまとめ、1988年には多年の業績によって芸術院会員にも選ばれた。

三浦文学の世界は広いが、その原点は故郷八戸であり、そこで91年の苦難の生涯を生きた母である。郷里を舞台にした作品も少なくないが、作品集『おふくろの妙薬』（1971年）、『母の微笑』（2001年）などが示すように、母を描いたすぐれた作品も多い。また三浦氏のたゆまざる文学的精進の支えとなったのは、師と仰ぐ井伏鱒二である。師への敬愛は終始変わることなく、井伏氏没後の全集刊行に際しても、監修者として積極的にそれを推進し、その完成に尽力した。

三浦哲郎氏は早稲田大学の文学的伝統を継承するとともに、独自の新しい文学的領野をきりひらいて文壇にゆるがぬ地位を築いた。また芥川賞をはじめ各種文学賞の選考委員をつとめるなど後進の育成と日本文学の振興にも多大の貢献をしている。

ここに早稲田大学は、三浦哲郎氏の顕著な功績を称え、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2003年3月25日

早稲田大学